

身体の平衡を保つ運動あそび — 2歳児における1年間の取り組みより —

大岡 徹 洋 木 許 隆
安城市立和泉保育園 岐阜聖徳学園大学短期大学部

Exercise to keep the body in balance: A one year study on a 2-year-old child

Tetsuhiro OOKA, Takashi KIMOTO

キーワード：幼児教育 運動あそび 保育環境 保育計画

I. はじめに

昨今、床に寝転びながら遊ぶ子どもや、椅子、机にもたれかかりながら遊ぶ子どもなど、正しい姿勢を保つことができない子どもが増えているのではないかと感じる。これは、子どもが生活する環境において、身体を十分に動かしたり、周りから得る刺激をもとに学んだりすることができていないのではないかと懸念する。運動あそびは、子どもの健康な身体を形成できるよう子どもが自主性をもって遊ぶことが重んじられている。そして、身体表現を十分に経験し様々な動きを獲得したとき、身体を支える力が発達していくのではないかと考えた。

研究を進めるにあたり、大岡ら（2017）は、「子どもの「リズムあそび」における保育者の関わり」において、4歳児を対象としたリズムあそびの展開がどのように身体機能の発達に関わるものかを明らかにしている¹⁾。また、前橋（2004）は、子どもの運動あそびについて、移動系の動き（歩く・走る・跳ぶ・スキップする・登るなど）、操作系の動き（投げる・蹴る・打つ・取る・止めるなど）、平衡系の動き（回る・ひねる・転がる・バランスをとるなど）の三つの運動技能に分類することができると言っている²⁾。

筆者たちは、保育所における勤務経験や、保育者養成校における勤務経験を通して、子どもが生き生きと活動する姿を目にしてきた。そして、本稿では、大岡ら（2018）が保育所へ通う2歳児を対象とした人間関係を構築するあそびとその環境構成について実践報告したもの³⁾をもとに、2歳児身体の平衡を保つ運動あそびについて1年間取り組んだ内容を報告する。

II. 研究目的

あそびの中で子どもが主体的に取り組む姿を観察し、子どもの身体の発達を促すことを目的とした運動あそびを設定する。そして、その実践内容を保育所保育指針第1章「総則」4「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」⁴⁾に照合し課題を見出すことを目的としている。また、実践の中で子どもが健康な身体や柔軟な動きを獲得し、あそびの意欲へ発展させたいと考えている。さらに、運動あそびの環境整備についても確認するものとする。

III. 研究方法

本研究では、保育所Aにおいて2歳児23名を対象とした運動あそびの実践を行う。そして、子どもの運動あそびの中で、子どもの姿を保育所保育指針第1章「総則」4「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に照合し課題を見出す。

IV. 研究内容

まず、子どもが展開する運動あそびを選択するにあたり、保育所保育指針第2章「保育の内容」より2「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」を参考にして、「身体の平衡を保つ運動あそび」を選択した。また、「ア健康」の「(ア)ねらい」にある「①明るく伸び伸びと生活し、自分から体を動かすことを楽しむ。」「②自分の体を十分に動かし、様々な動きをしようとする。」「③健康、安全な生活に必要な習慣に気づき、自分でしてみようとする気持ちが育つ。」を踏まえたあそびの展開を目指した。

4月から5月には、「ユニットサーフでユラユラ」を展開した。これは、子どもが立ち上がり平衡を保つことが難しいため、座ったままで行うあそびとして選択した。あそびの内容は、①子ども自身が興味を持つ。②遊具に乗り自分で揺れたり、保育者が遊具を揺らしたりする中で上半身の安定を図ろうとする。③子ども自身の思いや要求を表情や行動、言葉で保育者に伝えようとする。というものである。援助内容は、㉑あそびに対する子ども一人ひとりの興味を引き出すよう遊具を設置する。㉒子どもの気持ちを受け止める。㉓事故につながらないよう配慮する。というものである。

6月初旬には、「平均台(小)」を展開した。これは、子どもが立ったままで台に昇り降りしたり、渡ったりするあそびとして選択した。あそびの内容は、①子ども自身が興味を持つ。④平均台を昇降する。⑤目的をもって遊ぼうとする。⑥不安を感じたときに保育者に助けを求める。というものである。援助内容は、㉑あそびに対する子ども一人ひとりの興味を引き出すよう遊具を設置する。㉓事故につながらないよう配慮する。㉔子どもと楽しさを共感する。㉕あそびを提案する。というものである。

6月中旬には、「はしご跨ぎ」を展開した。これは、子どもが立ったままで片足を上げ平衡を保つあそびとして選択した。あそびの内容は、⑦格子を跨いで進む。⑧手足を使って、はしごの上に乗ろうとする。⑨友だちの真似をする。というものである。援助内容は、㉓事故につながらないよう配慮する。㉔はしごを床と並行に設置する。㉕あそびは提案せず、その場の状況を判断できるような助言をする。というものである。

7月には、「何が見えるかな」を展開した。これは、子どもが前屈した姿勢を保つあそびとして選択した。あそびの内容は、⑩保育者の真似をする。⑨友だちの真似をする。というものである。援助内容は、㉓事故につながらないよう配慮する。㉖保育者がモデルになる。㉗イラストを逆さまに貼る。というものである。

8月には、「桶で水運び」を展開した。これは、子どもが物を持ち、立った姿勢を保ったり歩いたりする中で平衡を保つあそびとして選択した。あそびの内容は、⑪桶の水を運ぶ。⑫繰り返し遊ぼうとする。⑬保育者と喜びを共感する。というものである。援助内容は、㉓事故につながらないよう配慮する。㉔子どもと楽しさを共感する。㉘桶やたらいに水を入れる。㉙子どものあそびを真似る。というものである。

9月には、「まねっこあそび」を展開した。これは、子どもが様々な姿勢を試すあそびとして選択した。あそびの内容は、⑩保育者の真似をする。⑭イメージを膨らませて身体を動かす。というものである。援助内容は、㉖保育者がモデルになる。①身の回りのものをイラストにする。㉚子どもを導くようなリズムをとる。というものである。

9月中旬から10月には、「平均台(中)」を展開した。これは、子どもが台から落ちないように心がけ、台を渡りきる目標を持ったあそびとして選択した。あそびの内容は、⑮目標をもって遊ぶ。⑯満足感や達成感を味わう。というものである。援助内容は、㉓事故につながらないよう配慮する。㉛子どもが目標を持てるように遊具を組み合わせる。㉜子どもの満足感や達成感に共感する。というものである。

11月には、「はしご渡り」を展開した。これは、子どもが身体のバランスをとりながら、様々な動きに挑戦するあそびとして選択した。あそびの内容は、⑦格子を跨いで進む。⑰手足をはしごに乗せ渡る。⑱保育者の援助を受けはしごの上を渡る。というものである。援助内容は、㉓事故につながらないよう配慮する。㉜子どもの満足感や達成感に共感する。㉝はしごに勾配をつけて設置する。というものである。

八つの「子どもの運動あそび」を表にまとめる。(表1)

表1 子どもの運動あそび

時期	あそびの名称	子どもの姿	援助と環境構成
4～5月	ユニットサーフ でユラユラ	①子ども自身が興味を持つ。 ②遊具に乗り自分で揺れたり、保育者が遊具を揺らしたりする中で上半身の安定を図ろうとする。 ③子ども自身の思いや要求を表情や行動、言葉で保育者に伝えようとする。	㉞あそびに対する子ども一人ひとりの興味を引き出すよう遊具を設置する。 ㉟子どもの気持ちを受け止める。 ㊱事故につながらないよう配慮する。
6月初旬	平均台（小）	①子ども自身が興味を持つ。 ④平均台を昇降する。 ⑤目的をもって遊ぼうとする。 ⑥不安を感じたときに保育者に助けを求める。	㉞あそびに対する子ども一人ひとりの興味を引き出すよう遊具を設置する。 ㊱事故につながらないよう配慮する。 ㊲子どもと楽しさを共感する。 ㊳あそびを提案する。
6月中旬	はしご跨ぎ	⑦格子を跨いで進む。 ⑧手足を使って、はしごの上に乗ろうとする。 ⑨友だちの真似をする。	㊱事故につながらないよう配慮する。 ㊲はしごを床と並行に設置する。 ㊳あそびは提案せず、その場の状況を判断できるような助言をする。
7月	何が見えるかな	⑩保育者の真似をする。 ⑨友だちの真似をする。	㊱事故につながらないよう配慮する。 ㊲保育者がモデルになる。 ㊳イラストを逆さまに貼る。
8月	桶で水運び	⑪桶の水を運ぶ。 ⑫繰り返し遊ぼうとする。 ⑬保育者と喜びを共感する。	㊱事故につながらないよう配慮する。 ㊲子どもと楽しさを共感する。 ㊳桶やたらいに水を入れる。 ㊴子どものあそびを真似る。
9月	まねっこあそび	⑩保育者の真似をする。 ⑭イメージを膨らませて身体を動かす。	㊲保育者がモデルになる。 ①身の回りのものをイラストにする。 ㊴子どもを導くようなリズムをとる。
9中旬～ 10月	平均台（中）	⑮目標をもって遊ぶ。 ⑯満足感や達成感を味わう。	㊱事故につながらないよう配慮する。 ㊲子どもが目標を持てるように遊具を組み合わせ設置する。 ㊳子どもの満足感や達成感に共感する。
11月	はしご渡り	⑦格子を跨いで進む。 ⑰手足をはしごに乗せ渡る。 ⑱保育者の援助を受けはしごの上を渡る。	㊱事故につながらないよう配慮する。 ㊲子どもの満足感や達成感に共感する。 ㊳はしごに勾配をつけて設置する。

V. 研究結果

「ユニットサーフでユラユラ」を展開した結果、①子ども自身が興味を持つ観点において、子どもは自らユニットサーフに乗るようになった。また、興味はあるものの離れて見ている子どもには、保育者が声をかけることによってそのあそびを体験することができた。②遊具に乗り自分で揺れたり、保育者が遊具を揺らしたりする中で上半身の安定を図ろうとする観点において、子どもは遊具に跨いだり、足や身体を前後に動かしたり、揺らしたり、保育者に揺らしてもらったりしながら上半身の安定を図ろうとしていた。また、揺れに対して上半身の安定が図れず遊具から降りてしまう子どももいた。③子ども自身の思いや要求を表情や行動、言葉で保育者に伝えようとする観点において、子どもは「やって」、「〇〇も（やってみたい）」などの言葉を発し、要求を満たそうとしていた。そして、言葉を用いず表情や身振りで保育者に伝えようとする姿も見られた。また、それぞれの子どもの思いが異なるため、保育者は子ども一人ひとりの思いを受け止める機会が必要となった。

「平均台（小）」を展開した結果、①子ども自身が興味を持つ観点において、子どもは遊具を見つけると喜んで取り組む姿を見せた。④平均台に昇降する観点において、子どもは平均台に昇ったり降りた

り、平均台の上を歩いたりして楽しんでいた。中には順序性や方向性を持たず、様々な位置から昇降する子どももいた。⑤目的をもって遊ぼうとする観点において、子どもは平均台から落ちないように慎重に歩き進み、それを渡りきると保育者とハイタッチをして喜んでいました。また、床に足がついてしまうと「ハッ」とした表情になりスタート地点へ戻る子どももいた。⑥不安を感じたときに保育者に助けを求める観点において、平均台を渡ることによって不安のある子どもは、「せんせ〜（手伝って）」と保育者を呼んだり、保育者の方に手を出したりして援助を求めていた。保育者は子どもの気持ちを受け入れ、繰り返し援助を行った。

「はしご跨ぎ」を展開した結果、⑦格子を跨いで進む観点において、子どもは足を交互に上げて格子を跨いで歩いていた。また、手で格子を持ち身体を支えながら、格子を跨いで歩く姿も見られた。⑧手足を使って、はしごの上に乗ろうとする観点において、子どもは手で格子を持ち、足を格子に乗せて、はしごの上をつたい歩くことを楽しんでいた。⑨友だちの真似をする観点において、子どもは周りの子どもが格子の上をつたい歩く姿を見て、自らあそびに加わり真似することを楽しんでいた。ここで言う、「友だち」とは、日頃からともに活動する子どもの関係性を指している。また、「周りの子ども」とは、日頃はともに活動しないが同じクラスの中にいる子どもの関係性を指している。保育者は、それぞれの子どもが考えるあそびになるよう一人ひとりの子どもに合わせた補助を行った。

「何が見えるかな」を展開した結果、⑩保育者の真似をする観点において、子どもは保育者の真似をして股のぞきをしようとするが、上肢を支えきれず床に手をつけて股のぞきをしていた。そして、姿勢の保持が難しい子どもには保育者が援助し、股のぞきの姿勢を伝えた。⑨友だちの真似をする観点において、子どもは友だちが股のぞきの姿勢をとっている真似をしようとした。また、股のぞきの姿勢で保育者と向き合い、呼びかけ合って楽しめた。さらに、子ども自身の姿勢を保ち、片手で手を振る姿があった。保育者は、逆さまに貼ったイラストを見るよう促したが、繰り返し見て姿勢をとる子どもはいなかった。

「桶で水運び」を展開した結果、⑪桶の水を運ぶ観点において、子どもは水をこぼしながらも桶で水を運ぶことを楽しんでいた。⑫繰り返し遊ぼうとする観点において、子どもは保育者や友だちと並行して運ぶことを楽しみ、それを繰り返していた。⑬保育者と喜びを共感する観点において、子どもは水を運んだ喜びを保育者に伝えていた。

「まねっこあそび」を展開した結果、⑩保育者の真似をする観点において、子どもは保育者の真似をし、様々な姿勢（ダンゴムシ、カエル、フラミンゴ、トンネル）をとることができた。⑭イメージを膨らませて身体を動かす観点において、子どもは様々な姿勢をとる際にイメージしやすい動物などの名前を保育者とともに言い合い、その姿勢をとることができた。

「平均台（中）」を展開した結果、⑮目標をもって遊ぶ観点において、子どもに順序性ができ、平均台から落ちないように慎重に歩き進む目標をもって遊んでいた。そして、床に足がついてしまうと自らスタート地点へ戻る子どもと、平均台に足を戻しそのまま歩き進む子どもに分かれた。また、スタート地点へ戻る際に「落ちちゃった」、「もう一回」と保育者に伝える子どももいた。⑯満足感や達成感を味わう観点において、子どもは平均台を渡り切ったり、「できた」と認識した子どもは「やったー」と喜んだり、保育者とハイタッチしたりして達成感を感じていた。平均台を一人で渡りきることができない子どもや自信を持っていない子どもは、保育者に援助を求め、手をつないで渡りきることによって満足感を感じていた。また、何度か繰り返す中で保育者の援助が少なくなり、自分でやってみようとする意欲が見られた。

「はしご渡り」を展開した結果、⑦格子を跨いで進む観点において、子どもは手足を使って格子を一本ずつ跨いだり乗り越えたりしながら前進していた。⑰手足をはしごに乗せ渡る観点において、子どもは手で格子を持ち足を格子に乗せて、つたい歩きながらはしごから落ちないように前進していた。子どもの姿勢は不安定で手足を交互に動かすため保育者の援助が必要となった。⑱保育者の援助を受けはしごの上を渡る観点において、子どもは保育者の手を握り格子に足を乗せて立ったまま前進していた。そし

て、友だちが遊んでいる姿を見て、保育者に「〇〇も（やってみたい）」と伝えたり、手を差し出したりにして援助を求めていた。このあそびを通して、子どもは友だちからの刺激を受け真似したり、子ども自身ができる渡り方を披露したり、好みの渡り方を何度も繰り返してみたりしていた。

VI. 考察

研究結果から、保育所保育指針第1章「総則」4「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に照合して考察する。尚、以下の下線部は、保育所保育指針に使用されている語句を用いている部分である。

「ユニットサーフでユラユラ」の結果から、①子どもが自らユニットサーフに乗るようになった場面では、自ら新しい考えを生み出す喜びを味わっているため「思考力の芽生え」であると捉えた。また、保育者が声をかけることによってそのあそびを体験することができた場面では、心を動かす出来事に触れ感性を働かせる中で、意欲をもつようになったため「豊かな感性と表現」であると捉えた。②遊具に跨いだり、足や身体を前後に動かしたり、揺らしたり、保育者に揺らしてもらったりしながら上半身の安定を図ろうとしていた場面では、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を働かせているため「健康な心と体」であると捉えた。また、主体的に様々な活動を楽しむ中で、自分の力で行うために工夫しているため「自立心」であると捉えた。③子どもが「やって」、「〇〇も（やってみたい）」などの言葉を発し、要求を満たそうとしていた場面では、保育士と心を通わせる中で、言葉を伝えているため「言葉による伝えあい」であると捉えた。そして、言葉を用いず表情や身振りで保育者に伝えようとする姿が見られた場面では、言葉や表現を身に付けているため「言葉による伝えあい」であると捉えた。

「平均台（小）」の結果より、①子どもが遊具を見つけると喜んで取り組む姿を見せた場面では、身近な事象に積極的に関わる中で、気付いたりし様々な関わりを楽しむようになっていたため「思考力の芽生え」であると捉えた。④平均台を昇ったり降りたり、平均台の上を歩いたりして楽しんでいた場面では、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しを持って行動しているため「健康な心と体」であると捉えた。そして、中には順序性や方向性を持たず、様々な位置から昇降する場面では、身近な事象に積極的に関わる中で、気付いたりし様々な関わりを楽しむようになっていたため「思考力の芽生え」であると捉えた。⑤子どもが平均台から落ちないよう慎重に歩き進み、それを渡りきると保育者とハイタッチをして喜ぶ場面では、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しを持って行動しているため「健康な心と体」であると捉えた。また、床に足がついてしまうと「ハッ」とした表情をしてスタート地点へ戻る場面では、様々な体験を重ねる中で、自分の行動を振り返っているため「道徳性・規範意識の芽生え」であると捉えた。⑥平均台を渡ることによって不安のある子どもが保育者を呼んだり、援助を求めたりしていた場面では、保育士と心を通わせる中で、言葉を伝えているため「言葉による伝えあい」であると捉えた。

「はしご跨ぎ」の結果から、⑦子どもが足を交互に上げて格子を跨いで歩いていた場面や、手で格子を持ち身体を支えながら、格子を跨いで歩く場面では、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しを持って行動しているため「健康な心と体」であると捉えた。⑧子どもが手で格子を持ち、足を格子に乗せて、はしごの上をつたい歩くことを楽しんでいた場面では、主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら達成感を味わっているため「自立心」であると捉えた。⑨周りの子どもが格子の上をつたい歩く姿を見て、自らあそびに加わり真似することを楽しんでいた場面では、友達と関わる中で、目的の実現に向けて、考えたり、工夫したりしているため「協同性」であると捉えた。

「何が見えるかな」の結果から、⑩子どもが保育者の真似をして股のぞきをしようとするが、上肢を支えきれず床に手をつけて股のぞきをしていた場面では、主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながらやり遂げることで達成感を味わっているため「自立

心」であると捉えた。また、姿勢の保持が難しい子どもには保育者が援助して、股のぞきの姿勢を伝えた場面では、身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わっているため「社会生活との関わり」であると捉えた。⑨友だちが股のぞきの姿勢をとっている真似をしようとしたり、股のぞきの姿勢で保育者と向き合い呼びかけたり、子ども自身の姿勢を保つために片手で手を振る姿が見られた場面では、友達と関わる中で、考えを共有し目的の実現に向けて、考えたり工夫しているため「協同性」であると捉えた。

「桶で水運び」の結果から、⑩子どもが水をこぼしながらも桶で水を運ぶことを楽しんでいた場面では、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動しているため「健康な心と体」であると捉えた。⑫子どもが保育者や友だちと並行して運ぶことを楽しみ、それを繰り返していた場面では、身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わっているため「自立心」であると捉えた。⑬子どもが水を運んだ喜びを保育者に伝えていた場面では、保育士と心を通わせる中で、言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えているため「言葉による伝え合い」であると捉えた。

「まねっこあそび」の結果から、⑩子どもが保育者の真似をし、様々な姿勢をとることができた場面では、身近な事象に積極的に関わる中で、考えたり、工夫したりするなど、様々な関わりを楽しんでいるため「思考力の芽生え」であると捉えた。⑭子どもが様々な姿勢をとる際にイメージしやすい動物などの名前を保育者とともに言い合い、その姿勢をとることができた場面では、様々な特徴やなどに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現することを楽しんだり、表現する喜びを味わっているため「豊かな感性と表現」であると捉えた。

「平均台(中)」の結果から、⑮子どもに順序性ができ、平均台から落ちないように慎重に歩き進む目標をもって遊んでいた場面では、身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わっているため「自立心」であると捉えた。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調節し、守ろうとしているため「道徳性・規範意識の芽生え」であると捉えた。そして、床に足がついてしまうと自らスタート地点へ戻る子どもと、平均台に足を戻しそのまま歩き進む子どもに分かれた場面では、身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わっているため「自立心」であると捉えた。さらに、スタート地点へ戻る際に自らの気持ちを保育者に伝える場面では、経験したことを言葉で伝えているため「言葉による伝え合い」であると捉えた。⑯子どもが平均台を渡り切ったり、「できた」と認識した子どもが喜んだり、保育者とともに達成感を感じていた場面では、主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、自分の力で行うために考えたり、工夫しながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わっているため「自立心」であると捉えた。そして、繰り返す中で保育者の援助が少なくなり、自分でやってみようとする意欲へつながった場面では、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせているため「健康な心と体」であると捉えた。

「はしご渡り」の結果から、⑦子どもが手足を使って格子を一本ずつ跨いだり乗り越えたりしながら前進していた場面では、遊びの中で充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しを持って行動しているため「健康な心と体」であると捉えた。⑰子どもが手で格子を持ち足を格子に乗せて、つたい歩きながらはしごから落ちないように前進していた場面と、⑱子どもが保育者の手を握り格子に足を乗せて立ったまま前進していた場面では、活動を行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになっているため「自立心」であると捉えた。友だちからの刺激を受け真似したり、子ども自身ができる渡り方を披露したり、好みの渡り方を何度も繰り返してみたりしていた場面では、保育士や友達と心を通わせる中で、豊かな言葉や表現を身に付けているため「言葉による伝え合い」であると捉えた。また、感じたことや

考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現することを楽しんだり、表現する喜びを味わっているため「豊かな感性と表現」であると捉えた。

Ⅶ. まとめと課題

八つの「身体の平衡を保つ運動あそび」を保育所保育指針第1章「総則」4「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目に照合したが、「ユニットサーフでユラユラ」では、10項目中「健康な心と体」、「自立心」、「思考力の芽生え」、「言葉による伝えあい」、「豊かな感性と表現」の5項目に該当することがわかった。特に、「言葉による伝えあい」では、子どもと保育者が心を通わせる中で、様々なやりとりを楽しみながらあそびの世界に浸っていることがわかった。

「平均台(小)」では、10項目中「健康な心と体」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「思考力の芽生え」、「言葉による伝えあい」の4項目に該当することがわかった。特に、「健康な心と体」では、遊具に興味・関心を持ち、昇降したり、その上を歩いたりする姿が見られ充実したあそびを展開していた。また、「思考力の芽生え」では、様々なあそび方について考え、順序性や方向性まで身に付けた子どもも見られた。

「はしご跨ぎ」では、10項目中「健康な心と体」、「自立心」、「協同性」の3項目に該当することがわかった。そして、「何が見えるかな」では、10項目中「自立心」、「協同性」、「社会生活との関わり」の3項目に該当することがわかった。また、「桶で水運び」では、10項目中「健康な心と体」、「自立心」、「言葉による伝え合い」の3項目に該当することがわかった。さらに、「まねっこあそび」では、10項目中「思考力の芽生え」、「豊かな感性と表現」の2項目に該当することがわかった。

「平均台(中)」では、10項目中「健康な心と体」、「自立心」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「言葉による伝え合い」の4項目に該当することがわかった。特に、「自立心」では、子どもが自ら工夫し、挑戦することから満足感や達成感を得ている様子が伺えた。

「はしご渡り」では、10項目中「健康な心と体」、「自立心」、「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」の4項目に該当することがわかった。

本研究では、2歳児を対象として八つの運動あそびを展開した。その中で「自然との関わり・生命尊重」、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の項目を確認することができなかった。しかし、本研究で用いた運動あそびを野外で行うことや、各あそびを連動させた形で行うサーキットあそびへ発展させることによって、10項目全てが網羅されると考える。

今後、2歳児を対象とした運動あそびの内容が、子どもの発達段階に相応しいものであるかという検証が必要となる。そして、子どもがあそびの体験を重ねることによって、どのような子どもに育っていくかを見守りたいと考えている。

注・文献

- 1) 大岡徹洋他(2017):「子どもの「リズムあそび」における保育者の関わり」, 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要第17号, 159-164.
- 2) 前橋明著(2004)『0～5歳児の運動あそび指導百科』(18版), ひかりのくに株式会社, 大阪.
- 3) 大岡徹洋他(2018):「2歳児における人間関係を構築するあそびと環境」, 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要第18号, 73-78.
- 4) 厚生労働省告示第117号「保育所保育指針(平成29年告示)」(初版), フレーベル館, 東京.

